



ネトラレ彼女

彼女の声は僕には届かない.....

変化は唐突に起きるとよく言われている。
実際そうなのだろう。周りが気づかないうちに
ひっそりと変化する。

俺の体が女になってしまったように。



「幸宏はいいよな男のままなんだから」

「それにスカートってなんでこんなにスースーするんだよ。これじゃあ落ち着けねーよ」

「はは、嫌がつてる割には様になってるよ」

「うるせー、そんなこと言われても嬉しくもなるともねーよ」

「まあ、まあ。とりあえず落ち着いて」



こんなふうになっても前と変わらずに俺に接してくれる友人に愚痴をばく。

少し八つ当たり気味に言うてしまったが、嫌な顔一つせず、いつものように俺をなだめてくれる。

こいつのこういう変わらずに接してくれる所が今はなんだか安心する。



「……はあ、なんで俺がこんな目にあわなくちゃいけないんだよ」

「愚痴っても、なっちゃったものは仕方ないよ晶ちゃん。それに国からも補助金を貰ったんでしょ」

「ああ、貰ったけど、そんなのより男に戻して欲しいよ」



そうは言ってもこの病気にかかって性転換した奴が元に戻ったなんてことは聞いたこともないけど。

「……はあ。俺、一生このままなのかな」

「元気だしなよ。僕も出来る限りフォローするからさ」

「おう……頼むわ」



少し前までは俺が面倒を見なくちゃダメな奴だ
という印象が強かった。

それなのに何故なのだろう。
コイツの笑顔がこうも頼もしく思えてしまう
のは。



幸宏と買い物物の約束をした待ち合わせの場所
でウザそうな男に絡まれた。

話しかけるなという雰囲気撒き散らして
るのに構いなしに話しかけてくる。



「しつこいなお前も！俺は元々男だったんだぞ。
そんな奴抱きたいのかよ、お前は！」

あまりにしつこいので男だったということを教
えてやったら余計に興味をもたれた。



「へっ♪珍しいじゃん。俺TSした奴とやったこと
ないんだよね」

「噂じゃ女の快感に慣れてないから簡単にセックスにはまっちゃうんだって。見た感じまだやったことなさそうだし俺が教えてやるよ」

「ふざけんなよ、誰がお前なんかと！」



「…は？何舐めたこと言ってるの？」

「お前に拒否権なんかあるわけねえだろ。
いいからさっさと来いよ」

そう言々と男は無理やり腕をつかみ強引に
連れて行こうとする。



「っ！いたっ！やめ…っ！」

「…は？」

「っ！」

怖い…。

今までだったらこんな奴、簡単にあしらえたはずなのに、こいつの目を見てしまったら恐怖で体が固まってしまう。



「晶ちゃん！」

「……あん？」

幸宏の声にハッと自分を取り戻す。

男の意識が俺から離れた隙に腕を振りほどくと
幸宏は俺の手を掴んで走り出した。



「はあ！はあ！わりい、助かった」

「ううん、別にいいんだよ。それよりもどうしたの？いつもの晶ちゃんならあんな奴一人ですうとでも出来るのに」

「…なんだか普通の女の子みたいだったよ」



ボソッ
「なんだよ、俺が普通の女の子みたいじゃ悪いのかよ」

「晶ちゃん？」

「なんでもねーよ！それよりさっさと買い物行くぞ！」

ムカムカとしたものを感じながら俺は幸宏を置いて歩き出す。

「あっ、まっでよ！晶ちゃん！」





「あいつの手、結構固くて男らしかったな。
気づかない間にあいつも成長してたんだ」

（……それに、俺の手を引っ張ってくれた時のあいつ
はいつもと違ってなんか……♡）

「んっ♡」

手は自然と下腹部に向かい濡れそぼった秘所を指でなぞる。

（何で俺あいつのことを考えながらこんなことしてるんだ）

（男のこと考えながらオナニーなんてこんなの変態じゃないか♡）



「んっ……♡はあ……はあ……♡あ……っ♡んんっ」

「ちよつと触っただけなのに愛液がトロトロ溢れてくる♡」

あいつの顔を思い浮かべながらする気持ちよさにゾクゾクとしたものが背筋を走り体が震える。

ちよ



(なんでだ?体だけじゃなくて心まで男じゃなくなっちゃったのか俺はっ♡)

(あうっ♡気持ちよすぎて指が止まらない♡)

(幸宏…っ♡幸宏…っ♡)







「はあ…はあ…いつちまった…」

「こんな姿見られたら俺嫌われちゃうかな」

……それは嫌だな。

そう、嫌なんだ。嫌われたくないんだ。
守ってやるべきだった奴が俺を守ろうと必死
になってくれる姿。

たぶん男の時だったら頼もしくなつたなと思う
だけだったんだろう。だが女になった俺はそれと
は別の感情が生まれてしまっていた。

認めよう、俺はあいつに惹かれていつてるんだ。



「よう、おはようさん！」

挨拶と同時に抱きつき後ろから胸を押し付ける。
自分の気持ちに気づいて以来俺は今まで以上に
積極的に幸宏に絡むようになっていった。



うちに遊びに来たとき薄着でいた俺をチラチラと見ていたし。密着するスキンシップをした時の反応から見るに幸宏も満更でもない様子だ。

自分を意識してくれているのだと思うと嬉しすぎて口角が上がるのが止められない。



「ちょ、ちよつと晶ちゃん!?いきなり抱きつかれたら……そ、その困るよ」

「えゝ、なんでだよ。女の生活に慣れるの手伝ってくれるんだろ?」

照れたように顔を真っ赤にする幸宏を可愛いと思ってしまうあたり俺もだいぶ女に近づいて来てるのだろう。



「あ、晶ちゃん離れて…」

「なんだよ俺に抱きつかれるのそんなに、嫌なのかよ…」

「べ、別にイヤってわけじゃないけど、その困るっていうか」



顔を真っ赤にしながらあたふたして前かがみになろうとしている幸宏の様子にようやくズボンの膨らみに気づく。

「……ああ、確かにこれは少し困るか」

うん、しょうがない。
こうさせたのは俺の責任だしな。



「幸宏、ちょっと人目につかない所に行くぞ」

「え？な、なんで」

「ばかっ！そんなんじゃ目立つだろ！どうにかしないといけないだろ」



「そ、そんな」と言っただって簡単にはおさまってくれないよ。君も男だったなら分かるだろ」

「分かるよ。だから、そんなんじや学校行けないし治すの手伝ってやるよ」

「て、手伝うって…?」

「いいから行くぞー!」

俺はそう言つと有無を言わず幸宏の腕を掴んで人気のない路地裏に入っていた。



「ほら、俺が手伝ってやるからさっさとチンコ出せ」

「うわーちようまっでー」

「いいからじっとしてろ」

慌てる幸宏を無視し、ズボンからそそり立つイチモツを取り出す。

「いっや……♡」



「うわぁ、スゲエなこれ。チンコってこんなにビクビク脈打ってたっけ？」

（擦るたびに先走りが出てくるし、やっぱり自分でやるより他人にやってもらうほうが気持ちいいのかな？）



「うう、晶ちゃんそんなにジロジロ見られたら恥ずかしいんだけど」

「あ、ああ、わりの。流石にでかくて驚いちゃった」

「うていうかお前、普段サヨナヨしてるくせになん
でここだけはこんなにデカイんだよ」

（俺の男の時よりデカくてちよつとショックだ）



（ていうか、こんなの本当に入るのかよ？）

「……それじゃあ擦るぞ」

「うっへっ…」

「うおー！手の中でビクビクしてる。何か自分以外のチンコ触るのって変な気分になるな」



「どうだ？気持ちいいか？」

「う、うん。晶ちゃんの指冷たくてほっそりしてて
凄い気持ちいい！」



（幸弘の声聞きながらチンコし」いてたら、なんか俺も変な気分になって来た）

「うっ、どうしよう。興奮してきてパンツが少し濡れて来ちゃったかも♡」

はぁはぁ♡

んん♡





（我慢汁で手がベトベトになっちまった。こんなに
出してもう射精したいのかな？）

はあはあ♡

んん♡

ひく
ひく

ちゅ
ちゅ



「出したくなかったらいつでもイッていいからな」

俺は上目遣いで幸宏を見ながら、「くスピードを上げる。」

「あー！うぐー！そんなにさねるともう、でるっ！」

はあはあ♡

ん♡
あ♡

ひゅ♡
ひゅ♡
ひゅ♡
ひゅ♡

「うっ! ああ!」

あ♡

「ん♡す♡こんなにいっぱい♡」

口に入った精液をクチュクチュと咀嚼しながら
精液を味わう。

美味しくはない。

……美味しくはないが、なんだかドキドキして
しまう味だ。

ひゅ♡

ひゅー♡

で♡こ♡る♡♡



「うん、めん、晶ちゃん！今拭くから！」

そう言うと幸宏はハンカチでベトベトになった俺の顔を拭いてくれる。

なすがままに拭かれながらようやく、我に返る。

「ほ、ほらこれでスッキリしたたる！終わったんだからさっさと行くぞー！」

「ま、まってよ！晶ちゃん！」

んん♡

ドロ…♡

ひく
ひく



「また、勃起したのか？しかたないからほら、素股してやるからこっち来い」

「うん」

俺は人目に付かない所に幸宏を連れて行くと誘うようにスカートをたくし上げる。



最近は何かあることに抜いてやっている。

未だに一線を越えていないが、学校に行く時はもちろん、こうやって二人で遊びに行っている時も抜いてやっている。



「うあ♥晶ちゃんの太股ムチムチしてて気持ちいい♥」

「…喜んでくれているのは嬉しいけどそれは褒め言葉なのか？」

ズブ
ズブ

はあはあ♡
あ♡



下半身に押し付けられたチンコが太股の間に差し入れられる度に勃起したチンコが内股を擦り付けられ熱さが伝わってくる。

息が屈きそうなほどに近くにある幸宏の顔にドキドキしてしまう。

ズブ
ズブ





「…っ♡あっ♡これ、なんか変…っ♡」

「パンツが擦れて頭ピリピリするっ♡」

ズ
ズ
ズ

あっ♡

は
は
は

あっ♡

「う…は♡ああ♡」

あまりの気持ちよさに声を抑えることが出来ず溢れてしまう。

幸宏のモノが擦れカリが引つかかる度に割れ目はヒクヒクと痙攣し股からは愛液が溢れてくるのを感じる。

ズブ

「う…は♡ああ♡」

あまりの気持ちよさに声を抑えることが出来ず溢れてしまう。

幸宏のモノが擦れカ리가引つかかる度に割れ目はヒクヒクと痙攣し股からは愛液が溢れてくるのを感じる。

ズブ

「う…は♡ああ♡」

あまりの気持ちよさに声を抑えることが出来ず溢れてしまう。

幸宏のモノが擦れカ리가引つかかる度に割れ目はヒクヒクと痙攣し股からは愛液が溢れてくるのを感じる。

ズブ

「う…は♡ああ♡」

あまりの気持ちよさに声を抑えることが出来ず溢れてしまう。

幸宏のモノが擦れカ리가引つかかる度に割れ目はヒクヒクと痙攣し股からは愛液が溢れてくるのを感じる。

ズブ

「う…は♡ああ♡」

あまりの気持ちよさに声を抑えることが出来ず溢れてしまう。

幸宏のモノが擦れカ리가引つかかる度に割れ目はヒクヒクと痙攣し股からは愛液が溢れてくるのを感じる。

ズブ

「う…は♡ああ♡」

あまりの気持ちよさに声を抑えることが出来ず溢れてしまう。

幸宏のモノが擦れカ리가引つかかる度に割れ目はヒクヒクと痙攣し股からは愛液が溢れてくるのを感じる。

ズブ

「う…は♡ああ♡」

あまりの気持ちよさに声を抑えることが出来ず溢れてしまう。

幸宏のモノが擦れカ리가引つかかる度に割れ目はヒクヒクと痙攣し股からは愛液が溢れてくるのを感じる。

ズブ





「うあ♥ドロドロの精液が太股から垂れて来る♥
興奮しすぎだろ♥」

「『めん晶ちゃん可愛かったから、つい』

「……ばっか」

エロ……♥

♡♡♡

はぁ♡はぁ♡♡



……一線を越えない日々。

こんな関係が続いて我慢出来なくなつたのだろう。
久しぶりに幸宏の家に泊りに行ったその夜に有無
を言わずに押し倒された。



「…あのさ、一つだけ聞きたい事があるんだけどいいか？」

「…うん、何？」

幸宏の目は真剣で俺もこういう関係になるのは望んでいた。

……だが、それでも聞いておきたい事があった。





「幸宏はさ、本当に俺なんかでいいのか？今のお前
ならちゃんとした彼女が出来るだろうし、元男なん
かの俺なんかと……んっ！」

幸宏の突然のキスに俺の言葉は途中で止められる。

「ん♡ちゆる♡ちゅぶ♡……おい、俺は真面目な話をしていたんだぞ。それをいきなり……」

「そんなアホなことを言おうとした晶ちゃんが悪い。僕は君がいいんだ。君だけが好きなんだ」

「あ、あほっ！そんな恥ずかしいセリフ真顔で言うなっ♡」

顔中が熱い、おそらく顔は真っ赤に火照っているのだろう。





「…たく。そんなに真剣に言われたら拒否れねえ
じゃないかよ。…いいよ、受け入れてやるよ♡」

「……うん、入れるよ晶ちゃん」

ガチガチにぞそり立ったイチモツを秘所に押し
付けられ、膣肉を掻き分けるようにズブズブと
挿入される。

ズブズブ…

びくびく♡

たば

たば

はあはあ♡

……っ

「……っ！全部入ったよ」

（あ……っ♡俺の中に幸宏のチンコが入ってる♡
本当にエッチしちゃってるんだ俺たち♡）

手の掛かる弟のような存在だったこいつと繋がって
る。男だった時には抱かなかった感情に全身が
震える。

ずっ♡

あ♡

はぁはぁ♡

びゅん♡

たっ♡

たっ♡



「晶ちゃん、大丈夫？」

「ん、ちよつと痛いけど大丈夫だから動いていいんだぞ」

動かされるたびに膣に鈍い痛みが走るが、俺の中で気持ちよくなつてくれる幸宏の顔を見ると嬉しくてそれだけで濡れてしまう。

ずん♡

あ♡

はぁはぁ♡

びゅん♡

たっ

たっ

.....っ





「晶ちゃん！晶ちゃん！」

「も、もっと激しくしてもいいんだぞ♡」

ぎこちない動きだが俺を求めて腰を振る幸宏が愛おしく、足を絡め自分から求めてしまう。

ずっ♡

ずっ♡

あ♡

はぁはぁ♡

っ

びゅん♡

たば

たば





「くっー!」めんー!もう出るー!」

ビュルルルッ!

「あ、ああ♥中で熱いのがっ♥」

(…おお♥な、なんだこれ♥お腹の奥に熱いのが
叩きつけられて拡がってるっ♥気持ちいいっ♥)

あっ♥

はぁはぁ♥

っっっっっ

びゅん♥

たっ

たっ

ひゅん♥

ひゅん♥



「あはっ♡出し終わった精液が中から溢れてくる。
セックスってすごいな♡俺はまっちまいそうだ」

あっ♡

はあはあ♡

ああ♡

びびり♡

たっ♡

たっ♡

3.0...♡

「おはよう、幸宏♪」

「あ、晶ちゃん……」

呼ばれて振り向くと今朝の彼女はうっすらと化粧をしているのに気づいた。

普段と違う彼女にドギマギしてしまう。



「あ、気づいたか？俺……ううん、私も、もう女
なんだしね」

「今までどうりにもいかなかったらうし。
少しづつでも変えていかないと♪」

「……」



「……なんだよ無言になって。そんなに似合っていないのかよ」

無言の幸宏にそんなにおかしかったのかと不安になってしまい、つい元の口調に戻ってしまう。



「い、いやそんなことないよ。その…可愛かったからつい戸惑っちゃったんだ」

「うん、その口調も可愛くて似合っているよ」

「そ、そうか♡」

（…こんな言葉一つで機嫌が戻ってしまふあたり随分と安い女になったよな）



「ん♡んくじゅる、んぐ♡じゅぷ♡」

「♡飯食べたらずぐに勃起するなんて我慢できなすぎだぞ」

「♡♡ごめん。でも女の子らしい晶ちゃん見てたら押さえきれなくなつて」

「ん♡ちゅぶ♡まったく仕方ない奴だな♡」
くぽっ

むいっ



「はあ、ちゅ♥れろ♥ちゆる♥んっ♥…ちゆるる
…ちゅぶっ♥」

渋々という雰囲気を出して啜えなおすが内心は
幸宏に女の子扱いされて嬉しくなってしまうてい
る自分がある。

ちゅぽ♥

しゅぶっ♥

むいゅ

んんっ♥

「…じゅぶ…ちゅぶつ、れる…んくっ♡…んっ♡」
チンコを咥えたまま口の中で舌を這わし回す。
男の…それも友達のチンコを舐めているという
本来ありえなかった現状にひどく興奮を覚える。

ちゅぽ♡

じゅぶ♡

むいゅ

んん♡

「はあ、ちゅ、れろ♡んく、じゅるっ……♡」

夢中でしゃぶり付いている自分はみっともない顔をしているのだろう。けど、こいつが喜んでくれると思うと嬉しくてより深く啜え込んでしまう。

ちゅぽ♡

しゃぶっ♡

むいゅ

んく♡



「う！晶ちゃんだすよ！」

「んぎゅん♡んぎゅん♡んぎゅん♡んぎゅん♡ちゅ、じゅるっ♡」

ちゅぽ♡

じゅる♡

むいゅ

んぎゅ♡

喉奥に容赦なく叩きつけられる精液。

男だった時なら嫌悪感が浮かんでもおかしくないそれを俺は躊躇なく飲み込む。

ひゅるっ♡

ひゅるっ♡

むいっ

んっ♡





「んくっ♡…ぢゅるる…ぢゅぶっ♡んっ…んぐ♡
ゴク…っ♡」

（多すぎっ♡…こんなに飲まされたらお腹の奥
が熱くなる♡）

ちゅぽ♡

ドロっ♡ふ♡

むいっ♡

んんっ♡

「ごめんね、せつかく来てもらっただっていうのに
幸宏の奴、出かけてて」

「あ、いや、いいですよ。お邪魔してるのは私の
ほうなんだし」

「はは、そう言ってもらえると助かるよ」



どうやら幸宏の奴は急な用事で出かけてるらしい。お茶を出して、もてなしてくれているのは幸宏の兄で良信さんだ。

小さい頃からお世話になっていて、私にとっても兄替わりだった人だ。



「それにしても晶ちゃん、ここ最近随分女の子らしくなったんだね。これだったら幸宏が夢中になる気持ちも分かるよ」

「そ、そうですかね？」



面と向かって褒められるのがきはずかしくて誤魔化すようにお茶を飲み干す。

そんな私を見て良信さんはいつもとは違う……けど、どこかで見たことのあるような目で見てくる。

「ああ、分かるよ。だって俺とあいつは兄弟だから
ね……」

……怖い。

そう思い立ち上がろうとするも体に入らず
崩れ落ちてしまう。



「あゝ、晶の体柔らかくてずっと触っていたくなる」

（ひうつ！嫌だ、嫌だ、嫌だ！気持ち悪い手で私に触るな！幸宏助けてっ！）

ぞわぞわとした悪寒が背筋に走る。
逃げようとするも体には力が入らず無駄に終わる。



「おっぱい手に吸い付くみたいに柔らかくて揉んで
るだけで勃起してきちゃったよ」

「こんないい体独り占めしてたなんて幸宏のやつ
許せないな」



「なんれ、なんれ「こんにゃ」と」

「はは、呂律が回ってないぞ。まあ、これは君たちTSした娘専用の特別な薬だからな。仕方ないといえ
ば仕方ないか」

「くしゅり…っ♡」

「そう、元男を淫乱なメスに変える薬」



「あ♡ああ♡♡」

「あ、そうそう幸宏なら当分帰って来れないから心配しなくても大丈夫だぞ。だから俺達は俺達で楽しもうぜ」



「ひぐうつ♡」

前戯もそこそこに良信さんは愛液で蕩けきつた
秘所にイチモツをあてがうと勢いよく腰を突き
入れる。

無理やりのはずなのに体は肉棒の侵入を許し喜ぶ
ように絡みつく。

ズブズブ...

ひぐ

んん♡

むに

むい

はあはあ♡





「おお♥おかひい♥こりえ、おかひいのお♥」

「うお……すごい絞まりだ！やっぱりTS娘は普通の女より気持ちいいな……！」

ひゅ

んん♥

はぁはぁ♥

むいゅ

むにゅ

ずが♥

ずが♥



(いやあ♡なにこれ♡こんなので、感じたくないのにつ♡幸宏以外のチンコでどうしてこんなに感じちゃってるのお♡)

はあ♡はあ♡

あひー♡

びゅ♡

むにゅ

むいゅ

ずが♡



「っ！気持ちよすぎて腰止まんないな。ほら、晶も
気持ちよくしてやるよ！」

「あぁ♡んひゅんっ♡あぁ……っ♡」

ずが♡

ずが♡

ひゅ♡

おおは♡

はぁはぁ♡



「らめ、らめえなのっ！きもひよくなっひや、らめ
なのにい♡」

「いいんだよ！俺のチンコでイキまくれ！
おらっ！TS娘に種付けだあ！」

「…っ！やらあ！やらあ！しよれらけはらめえ！」

おおほ♡

ひゅ♡

むにゅ

むいゅ

はぁはぁ♡

ずが♡

ずが♡



びゅるるっ！

「んひっ♡おおっ♡だひゃれちやつてりゅ
しゅーしでてりゅのお♡」

「うお！すごい勢いで吸い付いて来るな♪
晶やっぱりお前、淫乱の才能あるぞ」

「あ、そうそう。今のはちゃんと録画しているからな」

今の言葉にサーッと血の気が引くような感覚にとらわれるが良信さんはニタニタと気持ち悪い笑みを浮かべながら言葉を付け足す。

「大丈夫このことは幸宏にバラシたりしないよ。……晶がこれからも俺の言う事をちゃんと聞いてくれたらね」





はぁ
はぁ♡

「あれ、晶ちゃんお風呂入ってるの?」

「ゆ、幸宏!」
「めん!お風呂借りてるな!」

お風呂に入って少しのぼせているのだろうか
晶ちゃんの声は少し熱っぽい。

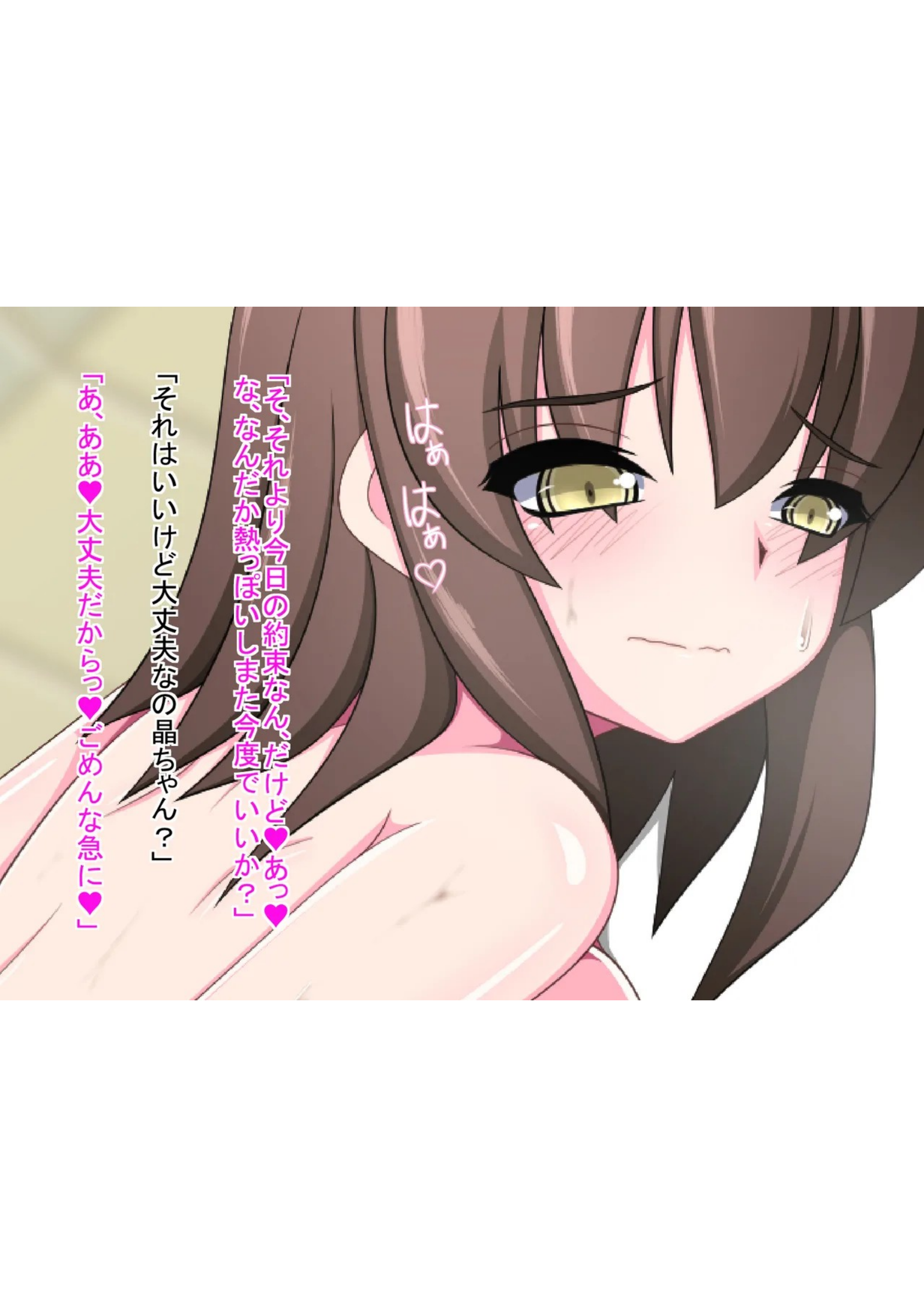
はぁはぁ♡

「ううん、それはいいんだけど兄さんどこにいるか知らない？」

「そ、その。急な用事で出かけるって…」

「ん♡その、合鍵の隠し場所知ってるし待てなくなったら帰ってもいいからって出かけていった♡」

「そうなんだ。まったく自分からお使い頼んでおいて勝手にいなくなるなんて相変わらずあの人は勝手だな」



はぁ
はぁ♡

「そ、それより今日の約束なん、だけど♡あっ♡
な、なんだか熱っばいしまった今度でいいか？」

「それはいいけど大丈夫なの晶ちゃん？」

「あ、ああ♡大丈夫だからっ♡ごめんな急に♡」



はぁ
はぁ♡

「いいよ別に。それじゃあ、僕一人で買い物に行く
から、体をちゃんと冷やさないようにするんだよ」

「う、うん♡わかったあ♡」

はあはあ♡

あ♡

「あぶなかったな。危うくバレるところだった」

「う幸宏と話してる最中だったのにこんな……っ♡
あいつに気づかれたら、私……っ♡」

先程から中を掻き回され危うく声を抑えきれなくなるところだった。

ずっ♡

ずっ♡





ああっ♡

はぁはぁ♡

「んっ♡中挟らないでっ♡」

こちらの気もお構いなしにズリズリと挟られる。
どんなに嫌がっても体は反応して愛液を溢れさ
せる。

すっ♡



はぁはぁ♡

あぁ♡

うん♡

「でも興奮しただろ？弟と話してる時の晶のマンコきゆうきゆう締め付けてきたぞ」

「そんなこと……っ♡」

ずっ♡

ずっ♡



はあはあ♡

あひ♡

うん♡

「そんなエロい顔晒しながら言っただって説得力ないぞ。本当はもつとして欲しいんだろ？」

「うーちがっ！そ、そんなことない！」

ずっ♡



はぁはぁ♡

おおほ♡

「意固地になるなよ。そらー！もっと感じさせてやるからさ」

「ひぐっ♡だめえ♡そんなに激しくされたら私っ♡やっ、やめっ♡奥グリグリしないでえ♡ダメに♡私ダメになるっ♡」

ずっ♡

ずっ♡

ひぐっ♡

はぁはぁ♡

おおほ♡

「っ、出るぞ!」

「っ♡いやぁ♡中はダメなのっ♡今出されちゃっ
たらっ♡」

「知るかよ!そら、受け取れ!」

っ♡



はぁはぁ♡

ああ♡

びゅるるっ♡

(あ♡ああ♡だされちゃったあ♡うわきセックス
でイカされて子宮まで犯されちゃってる♡)

(嫌なはずなのに、私の中で精子びゅくびゅく泳い
でるの気持ちいい♡)

いちゃ♡♡

びゅー♡



あれから頻繁に呼び出されるようになり、まるで情婦のように相手をさせられている。

幸宏には最近用事で忙しいとごまかしてはいるが好きな相手を偽ってまでこんなことをしてると思うと心が痛い。

……痛いはずなのに良信さんとの行為を重ねるたびに体は彼を求めてしまう。



「んっ……ちゅぶっ……んっ♡……ぢゅるる……ぢゅぶっ♡」

「すっかりパイズリフェラ上手くなったな。俺の教えが良かったからかな。幸宏にもやってあげたら喜ぶんじゃないのか？」



はぁはぁ♡

くちゅ

くちゅ

ぐにゅ♡

むにゅ

むにゅ

「…じゅぶ…ちゅぶつ、れる♡…そんな時間くれな
いくせに」

「じゃあ、この胸も口も俺専用ってわけか」



「れろっ…じゅぶっ、れろ♥…じゅぶ♥ぢゅるるっ♥」
好きでやってるわけじゃないはずなのに口は勝手に彼の喜ぶように奉仕してしまう。



「んっ、んちゅっ、れろ♡じゅるるっ♡」

「っ！出すぞ！全部飲め！」

「ふっふっ！んぐっ♡んく…っ♡「んく」♡♡」

くちゅ

くちゅ

はぁはぁ♡

「んっ…♡」

むにゅ

むにゅ



「ほら、尿道の中に残ってるのも全部すって」

「んくっ♡…ぢゅるる…ぢゅぶっ♡んっ…んぐ♡
ゴクッ…♡♡♡」

はぁ♡はぁ♡

言われるがままに口をすぼめ中に残った精液を
吸い尽くす。

どうしてだろう。もう薬を使われてないはずなのに
精液を飲み込むだけで私の体は疼いてしまっ
ていた。



いきなり立ったイチモツを自分から腰を落とし
受け入れる。
姿勢を支えるために指を絡め合うがそれはまるで
恋人同士のようなのだ。



「はあっ♡あっ♡ああっ♡」

「おおっ！チンコ入れた瞬間、膣内が絡み付いて来て……！そんなに俺のチンコ欲しかったのか」

（ちがうっ♡こんなに感じてるのは私のせいじゃないの♡バラされないようにっ♡こんな自分を幸宏に見られたくないから仕方なく感じるの♡だから……っ♡だから……っ♡）

ぬっ♡
ぬっ♡
ぬっ♡

はあはあ♡

あ♡



「あっ♡ああ♡いい♡チンコで下からこんこん
されるの好きいい♡」

「自分から恋人つなぎしながら男の上で腰を
振るなんて、つくづく淫乱だな」

「やあ♡言わないでえ♡」

ぬっ♡
じゅ♡
♡

はぁはぁ♡

あ♡♡

あぁ♡♡



「何が言わないでだよ。出し入れする度にこんな喜んでるのに」

「あぁっ♡だっ♡だっ♡だっ♡♡気持ちいいの止まらないんだもん♡」

ぬっ♡
ぬっ♡

はぁはぁ♡

あぁ♡

あぁ♡



「おっ！中の締め付けが強くなったな。もうイキ
そうなんだな。いいぞ好きなんだけイって。俺も
晶の中に生だしするからなっ！」

「ひぐうっ♥激しっ♥あっ、ああっ♥ゆっくりに
もっとゆっくりにっ♥」

ぬっ♥
じゅっ♥
じゅっ♥

はぁはぁ♥
あっ♥

きもちっ♥



「おら、俺の精液でいつちまえ！」

びゅるるっ！

「おほお♥イグっ♥精液出されていつちやう♥」
子宮口にグリグリと押し付けられ直接、子種を
注ぎ込まれる。

ひゃるる♥

ひゃー♥

はぁはぁ♥

あ♥

きもちー♥



「っっっ♡あ、あゝっ♡」

「はは、体はもうイキ癖が付いちやったかな？
俺の精液出されただけでイっっちゃうんだもん」



今日はいつもと違って外で呼び出される。

幸宏には用事で忙しいと言って遊びに行くのを断っている。
それなのにこんな所見つかったらと思うと気が
気じゃない。



「なんで外で待ち合わせなんて…。」

「いいじゃんか。たまには俺ともデートしようぜ。
それとも何？やっぱリエッチの方が良かったの？」



「ち、ちがう！こんなの幸宏に見つかったら大変だって！」

ニヤニヤと見透かすようにこちらを見てくる良信さん。

実際に私は期待していたのだろうか。
良信さんの顔を見てから私の秘所からはじんわりと愛液が溢れてくる。



「大丈夫だって。仮に見つかってもただたん
に
買
い
物
に
付
き
合
っ
て
い
た
だ
け
っ
て
言
え
ば
良
い
ん
だ
よ」





「やっぱりこうなったあ♡だから外は嫌だったのに♡」

人気のない場所に来るなり後ろから抱き着かれそのまま挿入される。すでに愛液で蕩けきつていた私の秘所は容易にそれを受け入れた。

あ♡♡

あ♡♡

あ♡♡

ずが♡
ずが♡



「そうは言っても晶のまん『グチヨグチヨ』だぞ。ちよつとデートしただけで『こんなになつて本当は期待してたんだろ?』」

「ち、ちがつ♥どうせエッチなことされるって思ったら体が勝手にい♥」

あっ♥

はっはっはっ♥

あぁ♥

ずが♥
ずが♥

「そう言うのを期待してたって言うんだよ。
ま、期待には応えてあげないと、な！」

「お」おっ♡お、おくゴリゴリってされて「れ
す」い♡」

「まったく、すっかり淫乱になっちゃって」

「だだれのせいだ」とっ♡」

ははは♡♡♡♡♡

ぬっ♡
ぬっ♡
ぬっ♡
ぬっ♡





（…どうしよう、こんなこと続けられたら頭バカになるう♡おほお♡おくでどんだん硬くなつて来てる。良信さんも興奮してるんだあ♡）

ぬっ♡
ぬっ♡
ぬっ♡

165 165
♡



「ほら、ここ突き上げられるのいいだる？
晶は下から突き上げられるの好きだもんな」

「ひう♡だめえ♡気持ちいいの止まらなくなるっ♡」

あっ♡

あひ♡

ぬっ♡
ぬっ♡
ぬっ♡



「…晶っ！中に！一番奥に出すからな！」

「ひああっ♥まだ中にな♥なかに出されちゃう♥」

あっ♥

あっ♥

あひ♥

ぬっ♥
ぬっ♥
ぬっ♥
ぬっ♥





「ほら、晶。舌を出せ」

「……んっ♡ちゅ、あむ、ちゅるっ♡」

グニグニと手の中で胸をいじられながら浅いきスから深いものに変わっていく。



（うあ♥頭の中クラクラする♥幸宏以外とキスして
いるのになんでこんなに気持ちいいんだ♥）
ビチャビチャと唾液同士が絡まる水音が室内に
立つ。口内に侵入してきた舌に、自分の舌を絡ませ
お互いに貪りあう。



「なあ、晶もう完全に俺のモノになれよ」

「な、なにを…」

「どうするっ…」で拒否したらもうお前は抱
かないし撮った動画も全部廃棄するぞ」



もう、こんなことをしなくていい。
それは私が望んでいた事のはずだったのに……

(……ごめんね幸宏)

「ん♡ちゅ……♡」

返事の代わりといわんばかりに私は自分から舌を
絡めに行く。



「今更そんなこと言うなんて卑怯だよ」

「……弟のことはいいのか？」

「幸宏のことは好きだよ。でも良信さんのことも好きになっちゃったんだもん」

「ね、抱いて♡もっと私のことを愛して♡」

「あっ♡ああ♡私っ♡おかひくっ♡だめっ、これ、
だめえっ♡いつもより♡すっ、すっすぎるう♡」

良信さんは私に自分を刻むように腰を叩きつ
ける。

突かれる度にどんどん敏感になっていく私の体。
ピチャピチャと粘液同士が絡みぶつかる妖艶な
音を部屋に響かせる。

ああ♡♡



「ほら、我慢しないで素直に受け入れたほうが
気持ちいいだろ？」

「うん、いいの♡私の中でおちんちんズンズンって
されて気持ちいい♡」

「おほお♡これ、しゅゝゝいのっ♡いつちやいぞう♡」

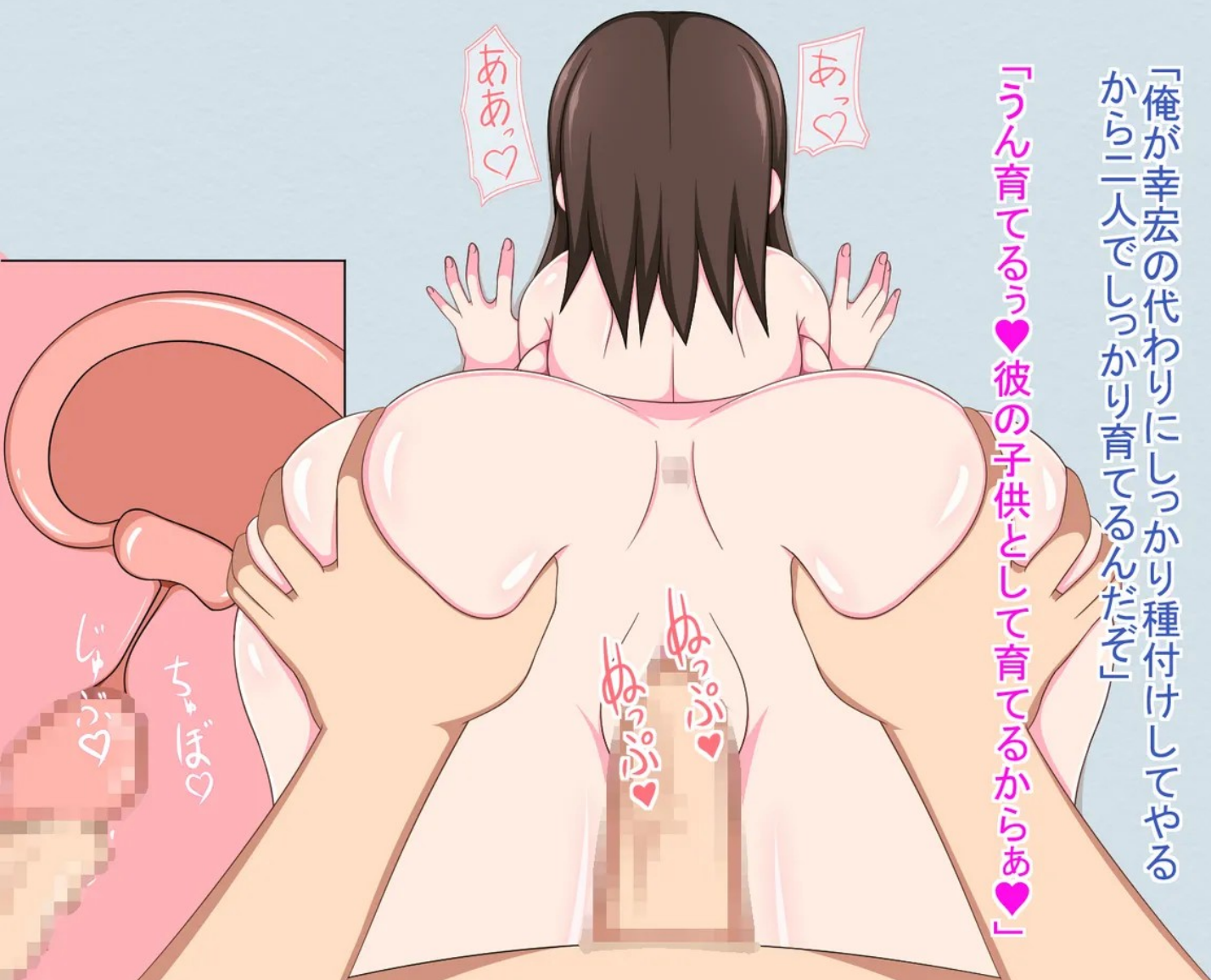
（お腹の中っ……子宮が降りてきちやつてる♡
赤ちゃん孕む準備出来ちやつてるう♡）

あぁ♡



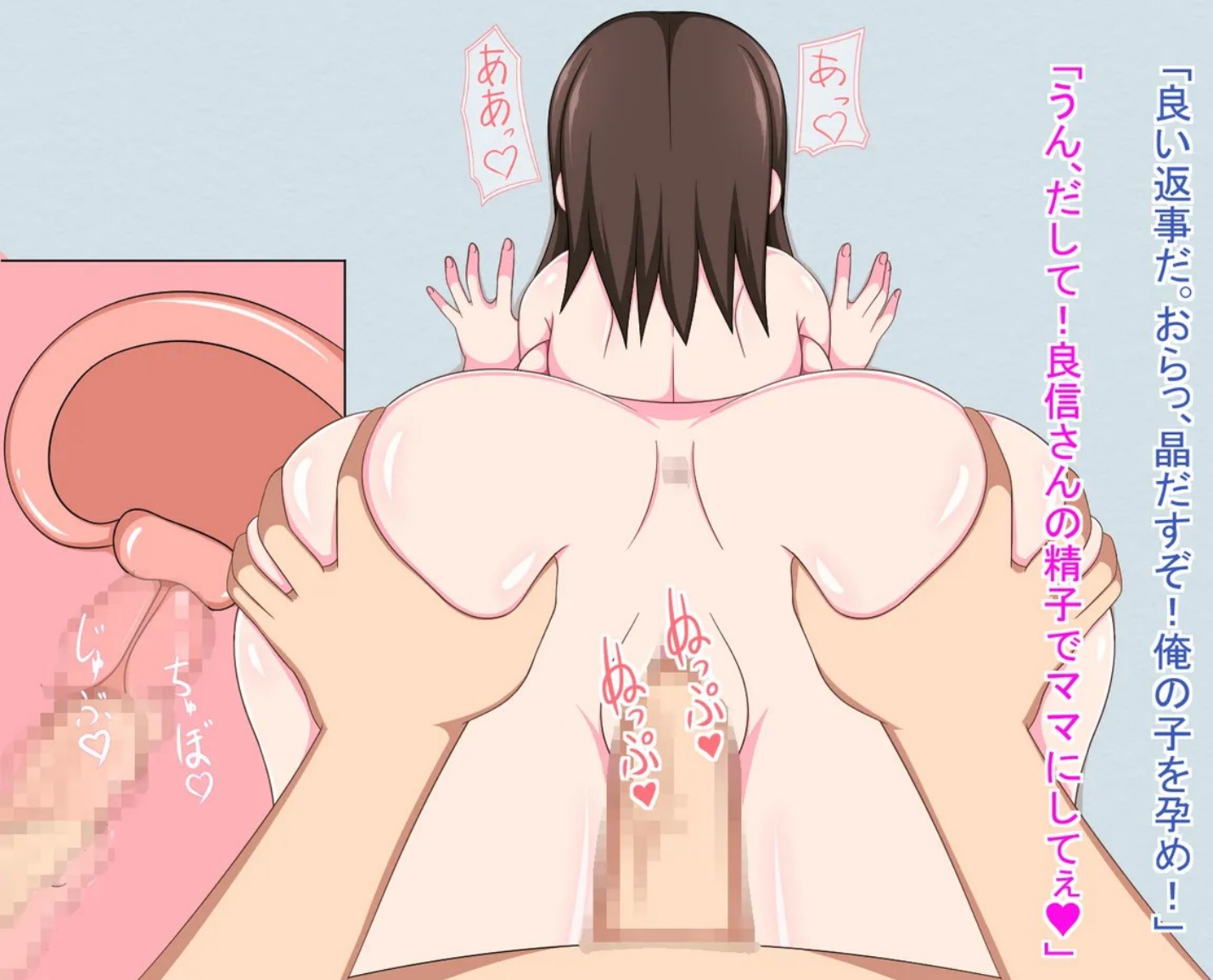
「俺が幸宏の代わりにしっかり種付けしてやるから二人でしっかり育てるんだぞ」

「うん育てるう♡彼の子供として育てるからあ♡」



「良い返事だ。おらっ、晶だすぞ！俺の子を孕め！」

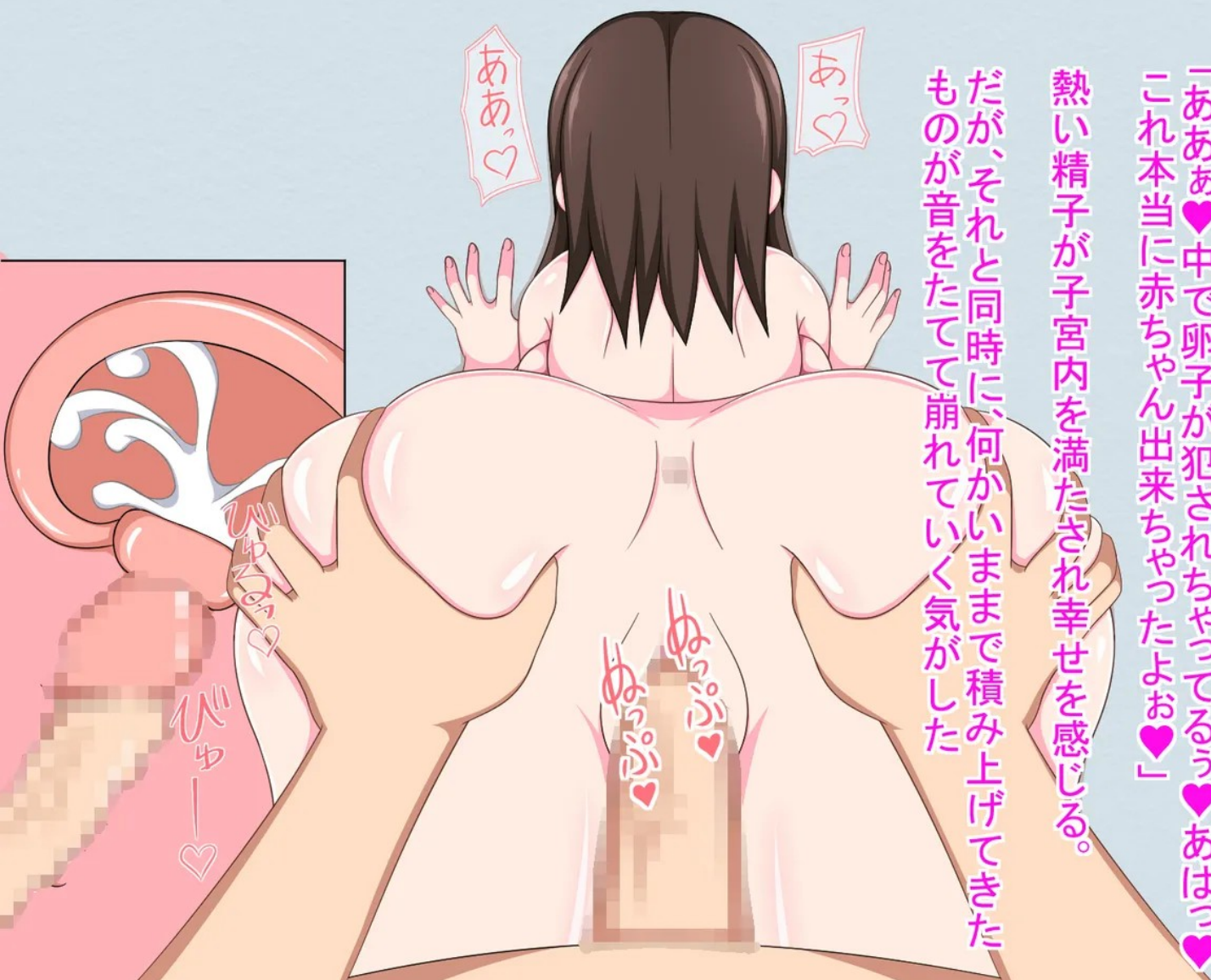
「うん、だして！良信さんの精子でママにしてえ♥」



「あああ♥中で卵子が犯されちゃってるう♥あはっ♥
これ本当に赤ちゃん出来ちゃったよお♥」

熱い精子が子宮内を満たされ幸せを感じる。

だが、それと同時に、何かいままで積み上げてきた
ものが音をたてて崩れていく気がした



「おはよう、幸宏！」

「あ、晶ちゃん。おはよう」

少し前まで用事で会う回数が減っていったが
どうやら最近でそれも終わったようだ。



「ね、幸宏。帰ったら今日もしようね♡」

妖艶な笑みを浮かべる晶ちゃんにゾクゾクとしたものが背筋を走る。
危うく今ので勃ってしまふところだった。

「う、うん。帰ったらね。た、楽しみはとっておかないと」

「うん、たのしみ♡」

































































































































































































































































